



所蔵 HK
神代文庫
番 9445
小番

文庫 5

昭和三十一年十月十日
法政大学図書印



式 下女 下女の言焼をねわ下女

下女は花と空のゆりたれしは母のま
めをこころ上ら花をせゆりしわしきわ
や所く空あり他去の手極

式 下女 下女の言焼をねわ下女

式 下女 下女の言焼をねわ下女

下女は花と空のゆりたれしは母のま
めをこころ上ら花をせゆりしわしきわ
や所く空あり他去の手極

式 下女 下女の言焼をねわ下女

下女は花と空のゆりたれしは母のま
めをこころ上ら花をせゆりしわしきわ
や所く空あり他去の手極

式 下女 下女の言焼をねわ下女

式 下女 下女の言焼をねわ下女

下女は花と空のゆりたれしは母のま
めをこころ上ら花をせゆりしわしきわ
や所く空あり他去の手極

夜言わひのあつすにり付此物さくは下
紙中膝よりし戸傍よりあけぬちをどく
中さうりくくをがまき生させサヤ一鳴く

亂語 建の申がさくさくさく

中んちうくか戸傍よりうくあしあ付
合よき能きましかささくさくあし

亂語 此物さくさくさくさくさく

つらつらさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさく

乱語 夜日あははりさくさく

さつちあさくさくさくさくさくさく
樞もあさくさくさくさくさくさく

風 風さくさくさくさくさく

は風さくさくさくさくさくさく
つさくさくさくさくさくさく

乱語 此物さくさくさくさく

折こりのあさくさくさくさくさく
は折こりさくさくさくさくさく

枕 枕さくさくさくさくさく

松もさくさくさくさくさくさく
いりさくさくさくさくさくさく

人 人さくさくさくさくさく

六 六さくさくさくさくさく
人のさくさくさくさくさく

六 六さくさくさくさくさく

六 六さくさくさくさくさく

六 六さくさくさくさくさく

六 六さくさくさくさくさく

六 六さくさくさくさくさく

六 六さくさくさくさくさく

六 六さくさくさくさくさく

六 六さくさくさくさくさく

六 六さくさくさくさくさく

六 六さくさくさくさくさく

六 六さくさくさくさくさく

六 六さくさくさくさくさく

竹の葉のあはれをいしはりのたふさ
秋のしきかな

蘆 芦花の海乃とふうり

渡江梁武帝のまゝとへらぬはるかな
よきよきかな

熱 熱帯の海乃とふうり

蓮花の海乃とふうり
武人の云々
海上のうらみと云ふは
白くし正宗の力乃
とやこれぞや

何 何れも此とらむ

乱 乱れをいしはりのたふさ

花 花のあはれをいしはりのたふさ

花 花のあはれをいしはりのたふさ

花 花のあはれをいしはりのたふさ

花 花のあはれをいしはりのたふさ

花 花のあはれをいしはりのたふさ

花 花のあはれをいしはりのたふさ

風 風のあはれをいしはりのたふさ

秋 秋のあはれをいしはりのたふさ

生 生れのあはれをいしはりのたふさ

氷 氷のあはれをいしはりのたふさ

氣 氣のあはれをいしはりのたふさ

猫 猫のあはれをいしはりのたふさ

月 月のあはれをいしはりのたふさ

春 春のあはれをいしはりのたふさ

春 春のあはれをいしはりのたふさ

春 春のあはれをいしはりのたふさ

春 春のあはれをいしはりのたふさ

春 春のあはれをいしはりのたふさ

春 春のあはれをいしはりのたふさ

引次くは 意の神乃長旅丹

其の中よりなるもの大形のそとゆふも
引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

引次くは 意の神乃長旅丹

誰もやまの大名をわいてい〜

大名をいづれに物をもたせしむるの御成程
なまなまをいづれに物をもたせしむるの御成程
なまなまをいづれに物をもたせしむるの御成程

師あはれりい〜人たり〜

師あはれりい〜人たり〜
師あはれりい〜人たり〜

後あはれりい〜

後あはれりい〜
後あはれりい〜

神もこのちをなせ〜

神もこのちをなせ〜
神もこのちをなせ〜

此もこのちをなせ〜

此もこのちをなせ〜
此もこのちをなせ〜

くちた系枝も花ハ咲〜

くちた系枝も花ハ咲〜
くちた系枝も花ハ咲〜

うら〜

うら〜
うら〜

春を〜

春を〜
春を〜

つひ雪も消る〜

つひ雪も消る〜
つひ雪も消る〜

風〜

風〜
風〜

秋日〜

秋日〜
秋日〜

碎〜

碎〜
碎〜

持〜

持〜
持〜

く〜

く〜
く〜

躍ぬらう場うもせいすしりり

赤刃の上よるひさし一入ふあしをぬれり
る直の中にも降き中も毎年うも
子一は出能志をその老をさくし西澤
ぬるひあわわんて

○ 雀乃甲はらんてたらちる

正しめのをらう又老の雀と申こむの甘
一もとうくら能し雀の中はあがりし
村作の風しんしんしん

むしけりあしめをのせしやうこを
作務をうもてるの竹たふふ
麻いよの付たあつし

来てこころうらむはねはれもの

波うこはうらやうか難心ねあしん
りふこころり羽のけあしんしん
るこの甘をうすすこころうり

○ 百姓ハみきしうここの温紙子

まてこころうらむを紙子のこころ
たふふあわちしうらり

節もひきあしこころうらみの神

百姓ひきあしこころうらみの神
くしそあしあしあしあしあし
あしあしあしあしあしあしあし
百姓ひきあしこころうらみの神

人あれたる事一はうらむこと打めて
右田あししる作て

我けぬこのさい菊うらむ

まけ雙六のちのとあしあしあし
つこ一入しあしあしあし

付墨六拾口白此内しん八句

右之外年志之句いふあし

能分はる屋はれ解り九点

も難かき百々新

多うたてしあしあしあしあし

子ゆりりあし

一首 卜養

よさ白のこりていれそ六十

そのそとあしあしあしあしあし

作者ハ根新年一あし 柳島あし

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

於吟松身

あまを付そちれ新行哉 梅翁

うそに藤の花や股の枯物吟松

甲松よ岸の松風ゆくの身て 夏溪

あまをよのゆく雪の白紙 従古

三方子月をのせくら 胡胡 松寸

祝儀申これ下と秋の色 正友

杉枝しつらぬきとあねあれ玉 為吾

心上げ何一人夜の夕暮 雅藝

そと透子眼ぶらまら 関所 心静

志ふれあり行より梅の先 枕草

奈良良也や南条を打直り 宗室

そしちて一月ま日曜の系 梅

声せえやと存秋乃鹿 吟

のりとも奥の山に櫻の月友
吹く糸の流るるあつては
合点のしるやを遊するん
ま髪をわらう中切てのけ
あやきと死意の双六宗純
そいかに揚心のお母がらん
の字もあつて文のねやう
ましこの朝に弦不花の縁松意
あつちをとりれあ年の去
二
多勢の庭のきき声もつて
汗の物うえりけし瓶も
今日ハ系極極一由ある友
一吹散すに目結あり
そしつりうのこさつてのうら
梅

悟色の富士も甲斐のころ
さけさけの腰をさるる遠か
穿人をしる梅摩丸して
異國よる腰病風や後人
ははと信作と葉の外さ
月二生きくらを申し七歩
とつて立の初好入る
あは声をもとるるあつち
下帯をさるる織いし
そいハ十六七の女部花
さよふとさつと落るる中
付所しをもつてあつち
こころのけりしあつち
古のたたくさるるあつち

初瀬の山不見く物の上ね
い糸蕪の葉の底通す中ん
秋乃神堂と云々ひさ風
衣のつとる顔ひのき来て
里の空有子大の子
夕飯のふとんくく月の光
あつと秋立去斗一也
を山北花乃燈し又延く
来ハ幾日のちの物
初芝居何もしり何と云
右歌の音も写く王と
是ハ板谷ふりして最の寺
皆人懐世心けし
物めよと本音物を出借よん
物 花 宗 在 忠 意

今井 やうし海河上あり
飯館の白きをみん月此夜
ゆをらふしちぬめくろ夜虫
悪人くく因果の種かきん
死をく掛し秋のちき
大波のよせしはゆる三輪り
くろく雨よまのと同く
以痛むらむを限とんくり
うすくそりりするぬる葉茶
き曲れ色はくぬも一也
名居ハおとれと立し次の方
廊下よるまはく蛇神
告いたくそく安藤の文
市場よむはる金を拾
物 忠 才 物 古 物 宗 在 忠 意

鳥のことく目小きそみりり
来の梢三尺おす此方カを後
あちをよみしそて道剥しはら
洞着も破れ衣引くけて
あつてまら月の舟明
冷しくあ河川の砂利ま
口降み深の末カししら
花んよ小老あ男女胡起子
皮着さくくゆ所堂此盤
園白カ料程よりかて版名厂
そそ升にゆく子まを不舟
縁ちるあ溢桶の汲あ
火あやしれ声庭の松く世
月よ又我う身はいつのまにや在

以重のくち新ふゆ
白菊乃白ひしら下穂香あ
なきはととせると令の小屏風
枕あはれゆく人の噂うけ
せめくちるさうとさしとあ
さしとくちあさこのまのこを
あひばのりく借縁カ樹
あつた余あ福し丹波越
ひましくくもの鬼のよた
掛るある面つらひは夢ひあり
砕たやうしく花を一枚
鳥井高を柳口甲り花陰を
越ハ喜の脈少くれしも
た有しとくちあ白下をあせ

古 木 花 舟 瓶 所 橋 忌 古 雅 川 物 道 為 古

古 物 宗 乃 此 古 物 寸 忌 古 物 宗 忌

双少の世性の十二ありは
を物いそちくくの傳書
いりか摩平目下派長務

右延宝三年五月十六日

於吟松亭
白粉完

- 梅翁十八 概筆一
- 吟松十四 為守八
- 愚溪十二 雅藝六
- 浪古十一 心静二
- 松寸六 宗重二
- 宗純五 松意十
- 正友六

内宏九系

各竹の筒よりさうり花乃録
 少を新茶れうけし友
 風海を猪子進くに梳去
 山用あしとし松虫此声
 松をくもあらしお月の夕
 高うちもくく泥障
 古きあらしも茶の静
 今身居るもの末乃
 河社にありた上里の
 勅傳只とて長日此の

浮世と親らさるるをヤに也
物もハ皆子らししこと
やうのふた神も大なるま交り
程もいたをもとらうのゆるさ
強河ちる中津の谷より茶やま
あしやとされまを修り者一人
なむほしし河津もまの河津
病のさうか 名の下
出れももより果るること十九
かれししししししししししし
程迄ま他のおまううううう
孝履と杖と家子ちること
長ちうり東もまの倒りの
損さうりししししししししし

生奥もは風こしてさうり口
こゑうりぬら 鮎かしししし
とめてうり糸糸もかゝる 糸の
南北はみ所 世の芝原
巖をこく白ひえうを名は
七条の詩より 切りか一折
丸あゝぬまの等并をの子
細物よりぬまの 陰もも
端ちうき 籠屋 内の女客
意向 ぬん ちうま 一と
くしけ ぬか ぬ川の 水社の 高
神もも 世を 好ら 夕うか
すうさうさ ぬまの 籠屋 ちうり
あゝさうさ の 籠屋 の 山

ひのけりとほねる夕時ふ
けくまのくさくさをめく 一行
あいのと引揚る川鏡
御懸山舟のまろ帆より
ほの子のま備格うの花の
宮よりまろくまれ明るの

西翁廿九

紫塵廿九

函山廿九

風虎六句

岩簾子六句

批等一句

五吟紅毛歌

紅毛歌のつらふあはれ
あつたけさる堀とあはれ
暮るる月のか入の再入て
ひく切子のほろやまを
兼信はるの戸をまはつ
破ちつらうくの朝のあま
宮よりまろくまれの
くすむ夕日子指をさる
長山や船を切きたる
酒名子まろくまれの

西翁

紫塵

風虎

岩簾

函山

似美

子

あ

あ

虎

眞此秋の世に故人といふは可
あなづねの好未乃月山
袖を穿すをむきては忍ぶ
風情ゆつれし浦の汐波子
あそむ空は空の名の汐斗
たうひこころと引し陣おを
頭の骨髄の強さといはれ
すしては秋ののこころを
あなづねの好未乃月山
書院をむきて下さるは茶
服を着てはむきかたの衣
初めり新あそびの夜
うはらぬは春ののこころ
境をうらむは春の山

浦風子吹くをむきては
浦屋の秋はあなづね
人よをむきたはむきかた
舞山ののこころは
秋の道のむきかたの
毒もやむは血をむきかた
初めり新あそびの夜
うはらぬは春ののこころ
境をうらむは春の山
西
子
鹿
子
山
春
子
鹿
春
山
子
鹿
春
山
子

好風の曇盤の上を流ひきて 子
ちうくのわしはかきうあつねと 孫
何れをねとてとてねれりし 菘
花のくきはそは路路り 鹿
後いゆりりし水声もあう 虫
やうしよよそを待てし 山
やもめは又才立をねりん 翁
そつゆふふふの十借を 子
陸奥のたれてくたをて 虎
観とらむも終り志の神 菘
才方の有かひひくはの花 山
さつちか切はうらひのあふ 妻
く母の容うらふも舞を能はて 子
難波のうらも唯あやや所 翁

清の春はきちうさうはあ 菘
一念の蛇の角いあつさう 虎
あ難き傍のをさう春起て 春
佛のうらも神もあうらん 山
白拍子式をあらう袖も 翁
しく志やうせんもあつさう 子
志のあねうらひのあつさう 虎
責めら水うらう名わらう 菘
路うらうのあつさう枕もあつさう 山
あつさうのあつさうあつさう 春
あつさうの月舟乃帆繩もあつさう 子
あつさうのあつさうあつさう 翁
あつさうのあつさうあつさう 菘
あつさうのあつさうあつさう 虎

あゝにわが足は是とこころに落さる
地獄の穴も折る前の山
あうねさうと他いすぢり悪人
其あくの縁は何物と人
花い雲山の扉風の眼をまこ
かきこむ産家の四方八面

西翁 十七句

炭簾子 十七句

風虎 十七句

紫塵 十七句

函山 十六句

似星 十六句

五吟及行状

六八や一尺きりし行ぬらん

炭簾子

袖に多のくや三甲女惟子 函山

木毛刀車よりる縁子 宗因

のうも結ゆる月も結ゆる 風虎

赤飯とこわし煮の井高尾 望蒼

砂うあつと砂夕 疎之麻子

背をよと吹折風の海より 山

路をよと柳下花あらしと 同

曲鞠を詠を詠してありわたり 虎

さわけくわあは産の伏 炭

這より多や其を差れ枕りし
神の志すしの中れや子
祈りぬれぬとて存く子
ケ根くのをしと相崎
空い山空ふいもと壇をこれ
風呂山と業とりしとあ
袖うきい平院のたのむと
小用とあ祈たをこれの月
落き方よかのく見し灯籠
彼人たうくと海あつとあら
事何や花ハ昔能飛々岩
二三里の居よせぬし
祈りぬれぬとて存く子
うはれとらうら 城や島石
山 因 似春 子 鹿 山

風説ハもつと云々のふく母
抱ん志とつとこのまき花あ
此振舞能ふと右鞭や子
てんやとらむいん夕られの月
意草のまのしとて何のた
冥子飛はもまき方よ入
男也と見ハ女のさうつり
夜もむの跡もたれちうひつ
浪舟の浪はさしとてうらと
糸白しとてあし山あしと
草の庵とさやあ身合の合う
うと世の夢ををいしてあ
花をとり花をとりて夫婦
花をとり花をとりて夫婦
花をとり花をとりて夫婦

幸於海ありて向の法水氷て山
ひのち梵字を月と白讀らん
礼をく一ふくして難あり
依此のけりよ新水れあり
宿とて三時を枕けと筆椽
傍部の身こそ成りあり
佛もふくありて又ちありて
望田よりよきる堂の枝水
石のや石切也してやまやい
あけのむしとささん作庵
仙洞の花子ちきうてわいす
十二をれうらちあり
勝産の月子えんをん親と親
志く物もはにさるやの起る

山 菘 子 菘 山 菘 田 山 子 虎 菘 山 菘 菘

かゝ鹿の弱れ使はしそふし
う〜け〜ら〜り〜 怯れ
旅衣とらありて川流り
捨ててくぬし人の一念
う〜〜徒十指のえをきん切
石乃多井子か〜 山
志〜〜ハ行志を体むる山
せおふ茶つちをわらも本れ下
めうり〜白〜子〜わ〜の碎
元道ののち中歌を〜ぬとも
は〜鹿〜子〜鹿〜と〜る
志居位子の漸し〜り
新燈の影と立よたそ〜
鹿れ〜つ〜も〜り〜云〜

子 菘 田 山 子 虎 菘 山 菘 菘

花をよみまじしとよき廊下
琥珀のくまをのりて奥方
明香に向ふて孫は持佛堂
船はあつしと此邊をこら
ゆあつしと海ふかのあつし
位よりいふとみ候りて
鳥居より猿借候りて
柳り立田子候候をいふ切
浦の月を添へて清ふ玉の思
さゆとあつしと料理とあつし
松の餅をぬき花を飾りて
一日うけつと花のをと山
おねを十ふりて雉子此声
思くくくく下子礼あり
函山

氏翁理承子とあつし菊の花
秋盡させと夕月のうけ
舟をいひぬけと笛のいひひ
天王寺前と海流浦うせ
云ひん雲とむしれ庚申
鶴とあつしとあつし
方候よりとあつし園を打越して
横田とあつしと又向りて
雲消して坂地とあつし水車
大木刀とあつしとあつし
岩ありとあつしとあつし
縷をつけとあつしとあつし
かきぬとあつしとあつし
あつしとあつしとあつし

人を身代りのおよびたつて
茶壺ひしつちやふりよるん
引付のちをもちて壺客山
祈禱これに火のれよん
新庵子いしつち吹を風の吹
みやまなりしおの藤野山
舟廻る流の来りこれ人も
天志る地志る好のましし山
里とわしむりいふ極りて
めしつちをまじる月の 蝶
お夢あもまらぬ火のあを
二つ三つよと子信子ゆり
眼をいかま捨てゆりまよ
ふそめれ笑いしつちるふ

楊也つし海のよのこく風風の強
あ子い望もこ人いあわれ
命たり危けつちをこけ子
あひつちをいしつち一見
傍眼白顔の古産を捨てし
衣文着てもよそねの記
指折つちをいしつちの年
柳の好もわらふつち
門のあれとをいしつち二人
志のふあけつちおやもつち
あつちもせいしたけつちその月
ふあつち神のつちいしつちねつち
矢つちつち鹿をいしつち引らふ
押つち入つち山もつちつち

長 子 木 花 思 山 流 子 木 園 山 花 子 着 虎 木 山 園 流 山 思 花 木 園 山 流 不

こころをなぐりけしよ人の色山
あけぬゆのよを自れとてゆ
思ふこといふ事れはしりて
明れぬとてあつとて北窓
あし花の言を親言はまとして
春の柳もよとてあつとて

一向流の遊あそび おとこ

あそび

初向ん地か本家れ花の友
念仏に五人学力声素賢
初衣かりて切とて事言とて如自
よきもさすあひく竹杖任化
あそびとてあそびのそねのそね朋之
あそびに里力も手移るる人翁
月の船とてあそびとてあそびとて
あそびとてあそびとてあそびとて
あそびとてあそびとてあそびとて
あそびとてあそびとてあそびとて
あそびとてあそびとてあそびとて

大風日南ちさうやあつらん
風のせんようをそとせぬ
のちり霧かきけしやまも
いずして空の霧の何れ
海をつらふ美濃の山此一夜
時をわかれかけをカノ声
傾城也泣きさきとあつらん
小うこころふかひのこころ
立んこそおれり月の
そやまもいづらん
ゆるみぬ百人松林の秋の
小倉の山をのさるるそん
いり又梅麻の雪をくろく
うらうけり松の村立

米俵運出れよひ声かきりあ
浦松うらうら八きり松林
此あひの子形の末の仲つ
拙僧と那うき松の
たのこ入りへい時後の出地
移してつらつこころあ
流るる水の名あや一里塚
汗工ぢりて出 古の
ついとゆるあつ白く月
うを葉くぬ秋のあ
福ありけしきしり雲の夕暮れ
あらしにほつあやめく
ひらうさのあり踏子まつらん
尾上のうの修り松

一 ねんくまふちまふちの初世山
男自惚も 松の 下 陰
ひんげの天狗の鼻を結らん
後 上 山 船 ぎ ぎ 声
を江の白嵐とて折ありふ
舟をさうすうさう流の舟
をけ挽もねえねえ 初嵐
舟の 斗の 葉あさりの 舟
あふ両白ねえねえ 流は 舟をさう
やせさうつた 葉 柳の 陰
三 ねんくまの小便たてのうまひん
床をさむひの夕まひしき
系橋を折さうりり 時を
あさくま 折さうりり 村 ぬ

う法の腕より 夢や時ぬん
角張るねねねねねねねねね
大飯のさあこのまの文とて
幕布のすもねの里 香 也
そあ 一 折さうりり 小松原
破つてひひひひひひひひひ
声さうさう車 提り 村をさ
宿折さうりりしうりれ 未
たのめ玉 折さうりりあさひ
三 東山より 折さうりり 風
世に中い 折さうりりあさひ
上手 折さうりりあさひ
燭をといてさうりりあさひ
枕屏風さうりりあさひ 七 折さう

こし差ハ孔子をさくも覚えそそ
おとろへくも紙をぬるる
草の宿もみ出さる病あり
万すハ清見山うけの里
花うねるも日の殿と也より
うろやまも白銀の
子信みのくまを包む依後り
天下版をからし後のみ
吾隠も戸出ぬ時の舟も
餅一斗二斗まのむの声
ひいとろも湯を秋やきむん
油菜の葉もたまらぬ
山風のそくちれそし古合羽
言根をひくひさる下屋

田子の浦おちる浪を飛こして
南を之雲の差のそめをうれ
そかかちまよりうれハ山吹子
かへひらひの山江原の袖
しゆいせん工吉那の山もさきたる
をそりハ遠近の里
くまかれれを帷子のいうちん
月もつりて海生を女を
きんけま挑灯のちも消えり
ふもそくくも夜あつきの未
え胸もあつてし朝細
十り十一子やとまららん
所もあつてと斗あつて
花散るるのせん 硯 紙

声 ぞくくもさしぬれよふ山梅
後 ころもくしめ浴室 あり 前
うけ去梅もめくりをさる法のあり
法浄石道 山石うけりめ道

两吟

兩首

淡とあつし人丸つしゆき玉髪
杜子美在破々竹の冬枯信之
風をく餘髪の上子吹落く
月新あそく折行が先
ちりそとそ厚の羽筆海きん
揚枝子けりし梅あたり
提ををひくくささの境法
出舟おさくさき

一ふしを視ふ境あひおせく
此庭をたふちたまりわらわら
らるよりし清くともをさ
ねそく丹梅の白ひうん
日くけても雪の声のさめこと
をけしハせもんふ後の袖
見在よらぬ父母く老のをも
まきくもさるぬ出をぬり
月の痛を是れはぬけんとねあうま
じん飛志てや あり 笑る
ゆやいふふ社の免笛ひやうら
きよききけり手つしこのき
ちり入みこわくの花乃宿
あれいねあふさき

二
初宿子おしとてこれ行来り
茶師の蕙子あつて湯らむ
ある山やまともいふは出用を
いふのさへ原嶽も大くせ
仕合もけ秋の田子もいふて
麻もころもとりあは八 懐
あつてくハ進之出る元此月
何者あつて酒ハ付さ
身代いつきとよしよりのし
ひよく此替玉子あつて
うつりて地ふ嶺もま
長穿人も懐之病か
かつりて我古いしる
吉野あつてしるま本

三
時をく様もてこれ作らぬ
双六盤もかき入る
長采ある風呂屋ハ新揚屋
は末も焼お伽羅のたさ
賤の女もつてわさるる
未だ途や清目も付らん
は宿をゆくと後出さぬ
いぬはいつの太おの浦
木綿帆をくけても本の海士舟
あつてあつてちる家のこし
船旁に帆もあつて山
名跡をしる言安の月
お寺極々を月ハ家も
あつてまをくあつて 一飯

慈悲を懐きて谷底を尋ねて
 多し古の果てに教生禁断
 竹藪のこゝと奥の山は似分
 ゆるきをさしぬる里番也
 合點の笑ひは如く 梳
 水野の口是と向ふ海をさる
 一村の雲の赤いゆを付子
 足本屋をさるるをさる くり
 小倉山おろけ志月秋の風
 おのきいけきを角の上の月
 雲おをかくこれ糸上階もかり
 ありま切し夕暮ののるも
 ふきさあらし野のあけの雲をさ
 あぢうけり山おとさる

青の昔を思ふ 影月
 老のぬきぬき 瑞あらし
 一ふくハ味の加減の茶をさ
 明け早と佛え舞やさる
 たちをさるる此種現世は
 物のさしひ 結せんらり 七
 様様さるるさるる 十田の檢と
 月うらな 中 のさるる 誦合
 即定むさるる乃十八遠あらし
 女史の年も味ら せられ
 つく 饅頭 ぬきぬき ぼく ぼく
 大佛殿も 浄存念の中
 古のさるるの 歌のさるるの
 万葉集も さるるのさるる

黄昏子也念かちの葉あひん
きる雁子のあつら月も照しく
立双ふ大蠟燭の光新し
能いそしきあきあき
神奈の松の梢にかけより
鳥の井子あつとと鞠ける也
下るのふさしく葉打けまじ
年もよりつて目もくねる
ひとりりめを枝も枝も
あつら此波のうつたのかり
あつらあつら海月のあつら
今もをうらふ持龜の甲
葉の種を隠居してこそあつら
紙袋よりあつらすく世長

南江あつら只一節の境のさや
ほまれのあつらあつら句
月の秋花の白粒を吊らん
あつらあつらあつらあつら
抱癒うとあつらあつら
先酒あつらあつらあつら
何事もれに入ぬらお借を
あつらあつらあつらあつら

去御奥方の遺言 あつらあつら

あつら

天よあつら地よあつらあつら
月も泪もあつらあつら
大あくひ必秋の神あつら
あつらあつらあつらあつら

雲をの白きをみればより階仕化
暮るるの折にをきし山風
行灯此類も木の宮れ夕よる
とこ後らんくは地への未
折ゆや行も流るも流川
咳気よあけき雲の戸の門
生薑酒杯の庵も月らあき
物のさししきさし端の考
すりそりの身はさす毎の秋の風
舟飛の上を流るかりり
宿習やいさ白雲れ未あらん
浮世はぬゆら車長持
丸あきよむもつしきけ浅
大神まもるる白我意

正垂いたつし一夜も物あし
神くくは御座らん
先心流は古宮あり吉野山
比方如くもくも重なる旅人
徳高屋廣き世のまをさす
日本橋も明くもさす
古のまんあき出せや都公
意也くは座にありあすり
善白此恨や山も流るらん
弓矢八幡余ふり松風
ありりやそは原氏のくしれ
六十巻もたつ実より
嬉しきを南正妙法の末きて
吾方も晴けりちの石塔

一の谷のあけをりし秋の風
大船小船月をきけき
酒肴の宴わつらむしめぬん
まの焼くもさきあるの何うし
かごころせう上帷子の袖よりそ
百おかしうをききし海路
はくも髪かきりあふみ成
怒ありしも一字のをきき
智名をききへとらるる都
これと板より詠のそりかき
茶湯は入りの舟つらむん
うらむれはかききしも時流に
天くすあつらん月の月見して
清静澄むる秋は夕暮

玉衣のいりくも同く秋の内
法衣よりのおくか山里
花嫁やは本れ庵の碎ぬん
柳のかりしうらむけこり
かご長きあひは初れ朝
衣及半の詠をききそ
清盃詠白濁をききぬん
年より柳ありききき
あさけりし存切りの世に人
悪きつより何よりか
云の原の詠をききぬん
折紙さたかきき明の月
牙子入るきききき
たきかきききききき

こそ修むむのりやを御らん
かたハ世へよそんのうちん
光陰の矢先よかゝる落おて
明行月の末方むの^ウ上
り^ウの首子け山里の出身多
高世とゆる法のの良身
氏花神の上世へん乃と
幾子代くときるの遊り
鈴の氣をよつてく音 柳
それけあおのの空人
白柏子の嵐の風よきあらん
追善のりよ遠方乃空

延宝五年五月廿五日

蘇何

暑気を去一服や先う茶碗

梅公翁

初と清き乃流れ各別 木刀
落潑け山石捨石物新考子 如見
紙書通てくう新 白を尾蠅
尸^{タカ}とて誰文があそゆらん 彦音
儒乃道^テ節^ハハ^ハの草 宗恭
それ名乃傳^テ奏^ハを五月流^テ 松白
大節定のうねも又ゆく 定祐

我木^ニ程^ニ是^ニもあ^ニる相^ニより保^ニ俊
戈^ノ鳥^ノ口^ノらね^ニる聲^ノも^ニ明^ニなる素^ニ玄
夕^ノ浪^ノ子^ノ嵐^ノを^ニり^ニて丸^ニあ^ニけて^ニ 桃^ノ等
枝^ノも^ニく^ニ是^ニハ^ニ出^ニる^ニ 船^ノ底^ノ 梅^ノ翁
芳^ノ丹^ノを^ニ追^ニ子の^ニ出^ニる^ニ 木^ノ刀
信^ノ成^ノも^ニる^ニ子^ノ草^ノ針^ノ判^ノ友^ノ 如^ノ兄
長^ノ風^ノ呂^ノ子^ノを^ニ知^ニし^ニひ^ニて^ニれ^ニぬ^ニ捨^ニ 定^ノ秋
り^ノ子^ノカ^ノ羽^ノハ^ニ出^ニり^ニた^ニれ^ニ物^ノ 歩^ノる
り^ノと^ニく^ニ人^ノり^ニと^ニら^ニと^ニ蓮^ノの花^ノ 素^ニ玄
何^ノり^ニと^ニあ^ニる^ニ魚^ノの^ニ目^ノ乃^ニ玉^ノ 保^ニ俊
姐^ノ箸^ノ子^ノか^ニる^ニ不^ニ乃^ニ秋^ノの^ニ月^ノ 梅^ノ翁
お^ニ出^ニ入^ノの^ニもの^ノを^ニ存^ニる^ニ 之^ノ 松^ノ白
花^ノあ^ニる^ニ或^ニハ^ニ香^ノ物^ノ 酒^ノ者^ノ 必^ニ見
先^ノ市^ノ乃^ニ店^ノさ^ニが^ニ依^ニ様^ノク^ニ枝^ノ 定^ノ秋

大^ノ黒^ノと^ニ夏^ノを^ニ隣^ニに^ニえ^ニる^ニ後^ノ 步^ノる
肥^ノく^ニる^ニ故^ノに^ニ家^ノ買^ノく^ニ来^ニる^ニ 木^ノ刀
志^ノく^ニが^ニあ^ニる^ニ智^ノ力^ノを^ニ以^ニて^ニ五^ノ人^ノと^ニ 松^ノ白
之^ノ梨^ノ壘^ノカ^ニる^ニも^ニむ^ニく^ニる^ニ 梅^ノ翁
塩^ノ辛^ノも^ニ我^ノ子^ノも^ニく^ニる^ニか^ニと^ニあ^ニけて^ニ 保^ニ俊
下^ノ子^ノが^ニ能^ニく^ニハ^ニ氣^ノう^ニつ^ニき^ニた^ニや^ニら^ニ 素^ニ玄
小^ノ使^ノの^ニ濁^ノり^ニも^ニ神^ノ力^ノを^ニあ^ニる^ニ 定^ノ秋
大^ノ根^ノも^ニあ^ニる^ニ洗^ノふ^ニか^ニる^ニ成^ノ川^ノの^ニ名^ノ 如^ノ兄
引^ノく^ニる^ニみ^ニら^ニみ^ニら^ニの^ニ賽^ノ下^ノ女^ノり^ニ振^ノ 梅^ノ翁
し^ノや^ノ面^ノ乃^ニ揚^ノる^ニ如^ニじ^ノや^ノの^ニ 素^ニ玄
悟^ノ氣^ノも^ニ今^ニあ^ニる^ニも^ニあ^ニる^ニ 素^ニ玄
枝^ノも^ニく^ニ是^ニハ^ニ切^ノ字^ノと^ニ思^ニつ^ニる^ニ 梅^ノ翁
月^ノの^ニ縁^ノ云^ニり^ニ事^ノに^ニ成^ニり^ニ 木^ノ刀
木^ノ戸^ノに^ニは^ニ後^ノり^ニく^ニぬ^ニる^ニ 松^ノ白

産物ししおるやあしほく虫の色 示刀
運来れうら産子あつらひ汐時 氏吉
松嶋子入舟出舟くらつらつと 如見
管ふのしら小沼サナきくをこふ 保俊
其川そらと瀬サヒかりもなうり 栞翁
何ふの國々山伏せつと 素玄
隔つらや霧も秋も人倫も 氏吉
等ケ子もら飯を破落とらふ 定祐
いりけをそのうし出くケウ 示刀
あそくや阿そく家ケの世北中 栞翁
の様とあつたえの月乃氣 保俊
此文ヒクランこくに融ヒクランカク 示刀
遠山乃花ヒクランはくを記左 報持 栞翁
表のりてあつた三味線 素玄

友乃目を大きくて埋む八重産 定祐
新らしい朝土乃ぬりやき 示刀
りし出ふえん砂サ神カあそんカ 氏吉
えんそま忘れ 示刀 数 栞翁
孔雀の尾風をよこす存あり 素玄
そ産人の聲がちぶらうた 保俊
家法ワカホウはく産の初カ海カより 栞翁
祈りのしら無意 氏吉 如見
字うちよひくう 氏吉 示刀
忽箱カより入智カしつ 氏吉
何の豆とみこしひ豆腐 栞翁
京を丸山あつた 氏吉 定祐
学も遊いおとと朝の月 如見
あり二宗一統のけらうけ 素玄

君がわの像ありてありて
 遊眼をせし 詠の念佛 如見
 以つて又白くも名を今に世への名 未刀
 物本よりさき 法を九 普 備 孝玄
 善くも出ぬ禱の形 目志直子 保俊
 徑よりいふなり子の出礼 招白
 花威通り所より 常盤橋 梅為
 まゆみより乃 孝玄の常盤 院 定祐
 梅翁十四 松白十一
 木刀十二 定祐十二
 如見十三 保俊十
 尾蠅一 素玄十三
 赤音十二 枕筆一
 宗恭一

京乃ほろをれ舟の中ニ於

云々仙

月乃外に京人禁制川瀬舟
 うれを陸より渡る 戸々わ 長流
 在者成神へのまね 踏ふて 梅翁
 つまきく二盃より 白葉 帆
 こはくわ乃 雲を尋る 懐子 院
 岩を由をぬの 藤乃やま 翁
 宵月乃 冬より 志す 梅翁
 舟あり 待女を 誰 院
 是くたら 眼甲 あり 翁
 其あちく かく あり 乃 函 翁

元順

秋乃風掃の小枝吹通し 素玄
 又友軍乃乃とてむい思下 定祐
 うす紀猪のねをそ肌と云は 保佐
 坤のひの烟中よりと云声 心仙
 江戸は名ね受の枕とて下 音如
 上野の花工終碎と云れ 林有
 大分のお布絶と云のどろり 尾蟻
 二十四日乃胡麻 保友

梅翁 十面 尾蟻 九
 保後 十一 定祐 九
 以仙 十二 音如 十一
 素玄 十一 保友 十三
 如白 九 枕草 一

よい声や米上ちる壱田植号 素玄
 引はちりきり名宗の眼 定祐
 山歌したる明の月をて 保佐
 さに織衣る川也楳音 玄
 かたひひととてをき秋の風 祐
 下くういりくく泊の土器 後
 おまへさぬ一さみ舞あはれま 玄
 田舎土産の烏帽子折巻 祐

禊子車をさしてりまぬ
 之乃日の出入りやう船城
 けりうよ皆ぬわれ扇の
 夫ささう浮むえさう公連
 之乃凡呂の心中はこそ有れ
 卒ひき不ちうし失却の
 ちとこあし目をうさせ
 中若の口ひあを
 死ねる命生り白さるとは某
 氣あたらうり百定乃る
 一町をわうし一躍
 乃乃出入を月とさう
 花あれり刻をまをを
 禊とむをんくえら伊勢様
 社 玄 後 社 玄 後 社 玄 後 社 玄 後 社 玄

振舞ハあるわうりい
 遠路と中山里とらむ
 引ねしをわ乃淋こと牛
山里の馳走み
 日さし山牡丹花
 人よりおりのちぬハ仙術を
 女乃脛いのあさるハ人
 只ひとは是ハししの悪衣
 法まとおやハハ帳かや
 おろささうさうねさおさ
 外まはく水がわう
 足引の山工入わう十方
 借後乃身工積う白雲
 法出てまをえとハさ
 口係くやハ月の新
 社 玄 後 社 玄 後 社 玄 後 社 玄 後 社 玄

